
さよならエデン

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならエデン

【Nコード】

N8137J

【作者名】

りいち

【あらすじ】

浮気、DV男と別れを決意した女の朝。短編『少し痛んだ。』の女目線です。

(前書き)

短編『少し痛んだ。』の女目線です。そちらにも目を通していただければ幸いです。

軽薄な男は嫌いではない。

馬鹿正直で誠実な男よりもずっと刺激的で飽きない、と思う。

あいつと一緒にいれば不幸になる。それは分かっていた。今まで軽薄で嘘の上手い男は沢山いたけれど、あいつ以上に冷ややかな男はいなかった。

それでも私は見てしまったのだ。時折現れるあいつの子供のような一面を。例えばそれは、セックスをしたあとに私の胸に顔をうずめてくる姿であったり、私の作った食事を不味いと言いながらも一口も残さずに食べてくれるところだったり。

だけど、泣きそうな顔して眉間に皺を寄せたまま私を殴る彼は、誰よりも粗悪に見えるが、きっと誰よりも酔狂なのだろうと思う。

殴る時彼は私に、泣いてみると口癖のように言った。だけど私は泣かなかった。理由は自分でも分からない。分からないから、泣けない。

この男には私が必要なのだ。一緒に暮らした一年間、男が他の女の元へ行っている夜は何度もあった。それはもう、数え切れないくらい。

だけど必ず帰ってくるのだ。この狭い家に。私の元に。

いつでもふらふらと色んな女の元を渡り歩く彼は嫌いではない。嫌いではないということとはつまり、好きだということ。

彼には私が必要だという事実が、私を支えていた。

どんなに殴られても、それだけは絶対だと思っていた。

しかし昨夜。いつものように私を殴る彼はどこか違った。

今までにないくらい荒れていた。

彼は私の髪の毛を掴むと引きずり回し、そのまま壁に叩きつけたあと、涙をこらえる子供のような顔で言ったのだ。

「お前、出ていけよ」

今までそんな台詞を吐いたことは一度だってなかった。本心から出た言葉じゃないと分かってはいたけれど、その一言は私の心臓を刺した。

殴られ引きずられ、脳がぐらぐらと揺れていた。床に倒れたまま、歪んだ視界の中で彼の顔を見上げた。

「どうして、そん、なこと言うの」

「だってお前、俺のこと好きじゃないだろ」

「好、きだよ」

「嘘だよ。好きだったら、もっと怒るだろ。怒れよ、つか、泣けよ。それができないならお前、一緒にいる意味なんてねえよ」

彼はその場に崩れ落ちるように膝をついた。頭をうなだれ苦しむ彼を見て、私はもう一度『好きだよ』と言った。それでも彼は、嘘だと言った。

その瞬間、私は泣いた。初めて泣いた。どんなに殴られても出てこなかった涙が、今更になって溢れてきた。

好きなのに、伝わらない。どうしたら信じてもらえるのか、その方法が分からない。恋に悩む多くの女たちがそう言って涙を流すように、私もまた、泣いたのだ。

だけど私のすすり泣く声を聞いても、彼は顔を上げなかった。その夜、私は悟った。もう、終わりなのだと。

彼がやっと寝静まった朝方の4時。

洗面台に向かってハサミを持ち、私は自分の長い髪に何の躊躇もなくハサミを入れた。

優しい時の彼が撫でてくれたこの髪が、私の自慢だった。一度も好きだとは、言ってくれなかったけれど。

ショートカットになった自分はまるで別人のようだった。全くと言っていいほど似合っていないかったけれど、それで良かった。

自分で髪を切ったのは初めてだ。揃っていない毛先を見ると、あまりの下手くそさに思わず吹き出してしまった。ひとしきり笑ったあと、また泣いた。

彼がこの髪を見たら何というだろう。そう思いながら棚の奥からスポーツバッグを取り出し、音も立てずに荷物を詰める。服を数着と少しの日用品。残ったものは彼が捨てればいい。

荷物が終わってから、顔を洗った。泣きはらした目の腫れが引くよう冷たいタオルを顔にかけてみたけれど全く効果がないみたいなのでやめた。

ジーンズとTシャツに着替えた頃、外の世界では朝日が昇った。

カーテンを締め切った薄暗い中で荒れた部屋を片付け、冷蔵庫の中の賞味期限切れの食料を捨てた。

薄く化粧をしてから鏡を見つめる。似合わないショートカットの自分は、それはそれで新鮮に感じた。

時計の針が朝の9時を指した頃、男は起きた。酒を飲んだわけでもないのに、ひどくだるそうだ。

ショートカットの私を見ると、驚いたように目を開いた。私は何も

言わずにただただ鏡を見つめる。
そんな私をひとしきり眺めたあと、男は口を開いた。

「何で切った」

「忘れたい男がいるからよ」

男が少しだけ息を飲むのが聞こえた。短い沈黙のあと、責めるような声音で男は再び口を開く。

「失恋したから髪を切るのか」

「そうよ」

「だせえ。馬鹿じゃねえの」

男が嘲笑う。不思議と不快ではなかった。

私は毛先を指に絡ませ、カールを作るように何度もそれを繰り返す。冷たい部屋が私の体を覆うような感覚に襲われた。窓も開いていないのに、この冷たさはどこから来るのだろうか。

横目で男を盗み見ると、男は私から目を逸らし、行き場を失った捨て犬のように壁を見つめていた。

それを見た瞬間、どうしても抱き締めたい衝動に駆られたけれど、私にはもうそれが出来ないのだ。捨て犬は、私なのだから。

「なに泣いてんだよ」

「うるさい」

「おい」

私の涙腺は崩壊してしまったのだろうか。静かに流れるそれを見ながら、拭うことも出来なかった。

瞬間、男の手が伸びてきた。叩かれる、と思ったが違った。男は私

の体を抱き締めた。

どうにか逃れようともがくが、男の力ではびくもしない。もがく程それよりも強い力で抱き締めてくるから、大人しくするしかない。

いや違う。これは抱き締められたのではない。締めつけられたと言
うのだ、きつと。

「愛してやれなくて、ごめんな」

男のか細い声が聞こえる。

どんなに殴られた夜よりも、その言葉の方がずっと、ずっと痛かった。本当に、痛かった。

私は男を愛していた。とても愛していた。愛した分、自分も愛されるのだと、とんだ夢見事だ。分かっていたけれど、それでも愛することを止めなかった私もまた、酔狂なのだろう。

でていく、と私は呟いた。男の腕からゆっくりと力が抜ける。そのあと、ああという返事が聴こえた。

もし男が引き止めれば、そしたら私は出て行かないだろう。男もきつとそれを分かっていた。だからこそ私を引き止めないことが、この男の精一杯の優しさなのだろう。別れとは、こんなにも重く、矛盾しているのだ。

私は荷物を肩にかけ、男の顔も見ずに玄関のドアを開けた。

別れの言葉はなかった。私も男も何も言わなかった。ただ背中に男の視線を感じるだけだ。

男が悪いわけではない。
私が悪いわけでもない。

ただ私たちは向かうべき場所を間違えたただけなのだ。引き返そうにも、もう道はない。

ああ、だけど。一度でも男を責めたのなら、明日は変わっただろうか。

さよならエデン

(もう戻らない)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8137j/>

さよならエデン

2010年10月16日00時27分発行